

実践=研究の思想

—活動における生涯性の意味—

『実践研究は何をめざすか』出版記念
2014年8月4日(月)

細川 英雄
(早稲田大学名誉教授/言語文化教育研究所)

1

発表の趣旨

- 1990年代後半に起こった実践研究は、15年の推移を経て、さまざまに変容しつつ、しかし確実に広がっている。
- 今、なぜ実践研究なのか。そこには、これまでの言語教育を乗り越える何かがあるのか。
- 人・ことばと文化・社会そして教育の課題をめぐって、実践=研究の思想とその意味について考える。

2

戦後日本語教育の推移と現状

- 1960-70年代にかけての言語知識教育—構造主義的
- 70年代後半から80年代にかけてのコミュニカティブ志向とコミュニケーション能力育成—語用論的
- 90年代後半からのポスト・モダン—社会構成主義的—言語教育としての専門性の意味の変容

3

「コミュニケーション能力育成」の目的化

- 実社会に役立つ「コミュニケーション能力育成」主義—必要な言語知識(語彙・文型)と仮想場面のタスク
- 技術としての専門性と定着—「お手伝い」発想と役割固定化
- 訓練と習得の目的化による消費されるモノとしての教師—目的論の不在

4

実践研究とは何か

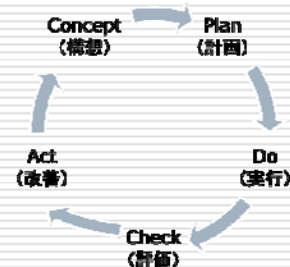
—90年代後半からの実践研究の動き

- 2000年、日振協の実践研究
- 2001年、日本語教員養成としての「実践研究」(早稲田大学大学院日本語教育研究科設置)
- 2004年、「実践研究フォーラム」の発足
- 2008年、『ことばの教育を実践する・探求する—活動型日本語教育の広がり』凡人社
- 2014年、今回の出版

5

実践研究の活動形態 CPDCAC

Concept(構想)→Plan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Act(改善)→Concept(構想)



6

実践研究のこれから-1

- サイクルとしての「C構想・P計画・D実行・C評価・A改善・C構想」の記述(「書く」)→設計理念の見直しへー実践研究のサイクルを創る
- 実践研究(実践＝研究)は、教師の自律を支える唯一の手段ー消費されるモノとしての教師からの脱却

7

実践研究のこれから-2

- 実践研究(実践＝研究)として、教師一人ひとりが、自らの日常の興味・関心から問題意識へという生涯的方向性を持つ。
- ことばによる活動を軸に、他者を受け止め、テーマのある議論を展開できるような場の形成をめざす。
- 生涯性のある実践研究へ(実践＝研究の思想)

8

実践＝研究の思想

- 実践とは、個人の日常そのもの
- 日常をどのように活動につなげるか
- 日常の意識化と活動の記述化ー実践活動の全容を継続的に「書く」という行為(実践＝研究)
- 実践＝研究の生涯性にこそ言語教育の未来がある

9

参考文献

- 細川英雄(2014)「教育実践における言語活動主体のあり方再検討ー日本語教育と日本研究を結ぶためにー」『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』ココ出版(予定)
- 細川英雄・三代純平(2014)『実践研究は何をめざすか』ココ出版
- 細川英雄(2012a)『「ことばの市民」になる』ココ出版
- 細川英雄(2012b)『研究活動デザイン』東京図書

10